

■上原専祿 歴史学者、思想家。歴史は自己に引合わせて見るべきと教え、反省無い知識人に幻滅、姿を消した。

うえはらせんろく

Bushidou・1899= 京都西陣の染物屋の長男に生まれる。

日露戦争始・1904= 5歳：父が日露戦争に出兵して、家業が立ち行かなくなり、

日露戦争終・1905= 6歳：

韓国反日暴動1907= 8歳：一家離散の憂き目に会い、松山の伯父のところに弟が出されそうになった際、申し出て嗣子となり、小学校に入學するとともに、読書に熱中するようになる。

アヲヲ創刊・1908= 9歳：

明治天皇没・1912=13歳：

雑誌{白樺}等の大正ヒューマニズム・河上肇「貧乏物語」等のマルクス主義に加え、田中智学の日蓮主義に影響を受け、伯父からは観世流の謡曲とともに法華經の真諦を教わり、日蓮を終生敬愛するようになる。

21ヶ条要求・1915=16歳：愛媛県立松山中学校を卒業、上京して東京高等商業学校(一橋大学)に入学するが、商人になる気は無く、

ロシア革命・1917=18歳：

大暴落・・・1920=21歳：研究科に進んで、三浦新七のゼミナールに入り、

原敬首相暗殺1921=22歳：

関東大震災・1923=24歳：在外研究生として渡欧、

ウィーン大学のA・ドープシュのもとで厳密な史料批判に基づく中世史研究を学ぶ。その助言で決めたテーマに取り組むうち、史料批判の問題に逢着し、自らテーマを変更して「フッガー時報考」をまとめ、

日本時代始・1926=27歳：帰国して、高岡高等商業学校教授になると、「富山売薬史史料集」の作成に着手、

共産党事件・1928=29歳：母校の後身東京商科大学附属商学専門部の教授となり、

世界恐慌・・・1929=30歳：同大学予科講師、

満州事変・・・1931=32歳：

のち本科講師も兼務し、生活が安定して研究に専念、

芥川直木賞始1935=36歳：

日中戦争始・1937=38歳：

第二次大戦始1939=40歳：同大学教授に昇格すると、

自らの研究の場ドイツが同盟国となったこともあって、研究成果の発表に取り掛かり、

日米開戦・・・1941=42歳：

・・・1942=43歳：

*在外研究時代の成果「フッガー一家時報」「クロスターノイブルク修道院のグルントヘルシャフト」を収録した「独逸中世史研究」を発表すると、学界に基大な衝撃を与える。「ラムプレヒト歴史的思考入門」、

年金+総武装 1944=45歳：「独逸近代歴史学研究」、

敗戦・・・1945=46歳：敗戦によって、

新憲法公布・1946=47歳：東京産業大学と改称された母校の学長に選ばれ、

大学の民主的な運営の実現につとめ、広く教育改革の見地から新制一橋大学へ移行させ、社会学部も新設するが、大学設置審議会委員長となってエネルギーを消耗し、日教組教研大会にも度々呼ばれるうち、

三大事件・・・1949=50歳：*解任される。「独逸中世の社会と経済」まで一連の発表が高い評価を受ける。

敗戦を思想的に深く受けとめ、知識人と大衆・労働者を結びつけ、アジア・アフリカに関心を向け、

独立回復・・・1951=52歳：「平和の創造」、

TV放送始・・・1953=54歳：「危機に立つ日本」「民族の歴史的自覚」、

55年体制始・1955=56歳：刊行始まる{高校世界史}{世界史講座}でも指導的役割。「世界史像の新形成」「アジア人のこころ」、

国連加盟・・・1956=57歳：国民文化会議の議長を引受け、日教組の国民教育研究所とも関わる。「世界史における現代のアジア」。

なべ底不況・1957=58歳：「世界の見方」、

インサントラマン・1958=59歳：「歴史学序説」など、*次々と書き下ろし、「日本・東洋・西洋」に対して「世界・日本・自己」という歴史学の枠

組を提示、「世界史像」の語を造って定着させる。教職の間、学生からは敬愛されたが、

安保闘争・・・1960=61歳：「日本国民の世界史」、*60年安保闘争の経験から、日本の知識人や進歩的政党に幻滅し、定年をまたず教授を辞職。社会から姿を消し、かねて親んでいた日蓮の研究に沈潜。

タイタイ病始・1961=62歳：

全国総合計画1962=63歳：

大学紛争始・1965=66歳：この頃、順次復刻される「大正新修大藏經」の購読を始め、また、「日蓮とその時代」「モンゴル人の世界征服と十三世紀ユーラシアフロアジア世界-日蓮認識の意味と方法に寄せて」という講演を行う。

全共闘への・・・1969=70歳：近代医学に殺される形で愛妻が死去、最後の砦を失って精神的危機に陥り、

以後、真の回向は死者との共闘にありとの心境に達し、その立場から壮大な世界史像を追求、

トルショック・・・1971=72歳：長女と京都に隠棲し、

日中国交回復1972=73歳：宇治に移って、

石油ショック1973=74歳：

角柴金脈辞任1974=75歳：精神的危機を克服する過程を「死者・生者」に著し、

ケアンブルール事件1975=76歳：自伝的文章「クレタの壺」を書いて、京都市桂病院で没したが、3年8カ月も世間に知られなかった。